

# 東北学院資料室

LIFE

Vol. 13

2014.4.1

LIGHT LOVE



## 寄稿

東北学院に残された学徒出陣史料について

河西 晃祐

東北学院時代の森本厚吉

仁昌寺 正一  
雲然 祥子

## 所蔵資料紹介

「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」について

— 学徒出陣関連資料を中心に —

星 洋和

## 高橋傳五郎所有の聖書と名刺

千島列島において殉難した高橋傳五郎の遺品。高橋は一八七一年生まれ。東北学院在学中の一八九三年、郡司成忠率いる千島拓殖隊に伝道師として同行するが、一八九四年ごろ、シャスコタン島で越冬中に殉難した。

写真の聖書は、高橋が千島拓殖隊に同行するに当たり同窓生から贈られたもの。高橋の死後、押川家に収蔵されていたが、一九六六年の東北学院創立八〇周年にあたり、押川昌一氏から寄贈された。



# C O N T E N T S

## ごあいさつ

「東北学院資料室」第13号発行にあたって 星宮 望 ……………1

## 寄稿

東北学院に残された学徒出陣史料について 河西 晃祐 ……………2

東北学院時代の森本厚吉 仁昌寺 正一 ……………6  
雲然 祥子

## 所蔵資料紹介

「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」について  
— 学徒出陣関連資料を中心に— 星 洋和 ……………15

## 2013(平成25)年度行事

東北学院125周年記念事業 図録『押川方義とその時代』刊行 ……………22

文化庁より「デフォレスト館」の  
登録有形文化財登録証とプレート授与 ……………23

東北学院大学文学部 史学科・歴史学科 創設50年記念事業 ……………24

宮城県教育委員会と包括連携協力協定を締結 ……………25

国土交通省東北地方整備局と連携・協力に関する協定を締結 ……………25

登録有形文化財「デフォレスト館」の魅力 シンポジウム開催 ……………26

東北学院 東日本大震災アーカイブプロジェクト  
『After 3.11 東日本大震災と東北学院』刊行 ……………27

時事(2013年4月～2014年3月) ……………28

東北学院の沿革 ……………30

受贈資料一覧(2013年4月～2014年3月) ……………36

# 「東北学院資料室」 第13号発行にあたって



東北学院 学院長 星宮 望

東北学院資料室は2001（平成13）年5月、建学の精神に関連する資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に資することを目的に、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂地階に創設されました。記憶にもまだ新しい2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災における礼拝堂の被害により、半年ほど閉館を余儀なくされた時期もございましたが、おかげさまで資料自体の被害は免れ、その後も同窓生をはじめ、多くの学生、生徒、そして一般の方々にご見学いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

さて、東北学院資料室は創設14年目を迎えるにあたり、かねてより検討を重ねてまいりました組織改革が推し進められ、2014（平成26）年4月より「東北学院史資料センター」と改称し、新たな一步を踏み出すことになりましたことを、ここにご報告させていただきます。今後も、本院の歴史に関する調査・研究をすすめ、なお一層地域に貢献できるよう努力してまいりたいと存じます。

「東北学院資料室」として最後にお届けいたします資料室年報第13号には、本学文学部歴史学科教授の河西祐祐先生と同経済学部経済学科教授の仁昌寺正一先生にご寄稿いただきました。2013（平成25）年は、新聞やテレビでも報道されておりましたとおり、学徒出陣70周年にあたる年でありました。外部からの調査依頼により、本学にも志半ばで学業を中断し戦地に赴いた学生達があり、関連する史料も数多く残さ

れていたことが明らかになりました。そこで、河西先生には、本学に保管されている大変貴重な史料の一部を紐解いていただき、紹介と解説をいただきました。さらに、資料室嘱託職員の星洋和氏には、資料室に保管されていた、当時外部と取り交わされた書類綴を中心にご紹介いただきました。また、仁昌寺先生には、1901（明治34）年から2年間にわたり本学で教鞭をとられていた森本厚吉氏の動向について、『東北学院理事会記録』および『私立東北学院普通科教員会記録』などの史料をもとにご執筆をいただきました。ご高覧いただけましたら幸いです。

「東北学院史資料センター」と改称し、組織も強化されましたことから、今後の調査および研究につきましては、更に充実していくものと確信しております。創立128年となる東北学院の歴史と共に、先人達の想いを伝えていくことを忘れることなく、新たな研究成果を皆様にお届けすることができるよう努めて参ります。今後とも、皆様のご協力をお願いいたします。





# 東北学院に残された学徒出陣史料について

東北学院大学文学部歴史学科教授  
河西 晃祐

## はじめに

本校における学徒出陣関連史料の精査は、端緒についたばかりである。2014年4月には東北学院史料センターが設立され、調査も進められていくことになる。本稿はそのための基礎作業の一環である。

まず関連史料が「発掘」された経緯から述べておきたい。2013年9月23日放送のNHK番組「ニュースウォッチ9」で、学徒出陣の小特集が組まれた。その過程でNHK取材班は、全国の大学にたいして、学徒出陣関連史料の有無や大学当局が把握している出陣数などの調査依頼を行った。資料室職員星洋和氏はそれに応じて、すでに学内関係者の一部には存在が知られていたものの、従来の『東北学院70年史』や『東北学院100年史』でも十分には活用されてこなかった、文部省から東北学院に送付された公文書類を綴じた簿冊群の調査を行った。筆者はこの過程において、取材のための史料配置などを若干指導したものの、今回の発見はひとえに星氏の献身的な努力によるものである。

「ニュースウォッチ9」においては、OBから寄贈された礼拝堂で行われた出陣学徒壮行会を写した写真類などが中心に紹介されたが、筆者と星氏のその後の調査で、先述の公文書類が、学徒出陣をふくめた戦時下の文部省と大学の関係を考察するうえで、高い史料価値を持つことが明らかとなってきた。簿冊群の全体像については、本号掲載の星氏の別稿を参照していただきたいが、本稿においてはその簿冊に綴じ込まれていた史料の一部を紹介していきたい。

## 1. 学徒出陣にいたる歴史的経緯

日本海軍・連合艦隊による1941年12月8日の真珠湾攻撃と時を同じくして、日本陸軍はマレー半島への上陸作戦を開始した。マレー半島を南下した陸軍部隊は、翌42年2月にはシンガポールを攻略した。また蘭印（現インドネシア）攻略部隊は、同年1月に上陸を開始し、3月にはジャワ島を攻略した。

しかしながらこのような日本軍の進軍は、長くは

続かなかった。1942年6月のミッドウェー海戦での航空母艦を喪失したのちも、日本海軍はF.S作戦といわれる南太平洋進攻作戦を実行したが、1942年12月以降になるとアメリカ軍部隊の本格的な反攻作戦に遭遇することになった。その端緒となったガダルカナル島戦に際しては、日本陸軍は兵力の逐次投入という失策を重ねて兵力を損耗し、陸軍と共同作戦をとっていた海軍もまた海上兵力と共に基地航空戦力を失ったのである。そして、このような戦況の悪化のなかで、全国の大学や高等学校、専門学校（いずれも旧制）の文科系学生（師範系学生を除く）の徴兵猶予期間が1943年10月に撤廃されて、本格的な学徒出陣がはじまることになる<sup>1)</sup>。

## 2. 先行研究動向と研究史上の課題

これまでの学徒出陣の研究は大別して、戦没学生に焦点を当てたもの、そして大学史の一環として行われたものに大別して考えることができる。前者の歴史は古い。その代表的な存在といえるのが、東京大学戦没学徒兵の手記をあつめた『はるかなる山河に』（1947年発行）、1949年の『きけわだつみのこえ』の発刊を契機として1950年に発足した、日本戦没記念会、いわゆる「わだつみ会」の活動である。政治運動への距離といった数々の困難な問題に直面し、数度の解散と再結成を余儀なくされてきたが、学徒出陣者を中心とした戦没者学生の意味を早くから世に問い続けた意義は大きい。

一方の大学史としての研究である。ここでは1990年代と2010年代に刊行された二つの先行研究を取り上げていきたい。まず東京大学史料室の編纂した『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学出版会、1998年）である。同書は1993年から1996年にかけて東京大学史料室が中心となって、旧制高等学校、大阪大学、名古屋大学などの学外調査に加え、学内調査によって収集された史料をもとに編纂されたものである。各大学の大学史における関連記述の有無を調べ、調査票のサンプルを載せるなど、現在でも参考となる。もう一つの明治大学史料セ

ンター『戦争と明治大学——明治大学の学徒出陣・学徒勤労働員』（2010年）は1986年、1990年、1995年の調査をふまえて、新規調査を加えたものである。

確かに従来の研究によって、たとえば兵役法改定といった日本政府サイドの動きについては多くが明らかとなってきた。しかし政府機関の当事者というべき文部省の動向、文部省から高等教育機関への具体的な指示内容は必ずしも明確にはなっていない。記録保存体系が明治時代にはすでに確立していた外務省などと異なり、文部省内には戦前・戦時期の一次史料群は残されていないとされており、文部行政史というべき研究も十分ではない<sup>2)</sup>。そのため各大学に送られた公文書類が、それを補完しえる貴重な資料となる。

そのような状況を踏まえて、二つの先行研究に共通する課題は次の二点にあるといえよう。一点目は学内に残された公文書類の公開という観点である。東京大学の場合は、学内に残されている文部省との往復文書類を「学徒勤労働員・学徒出陣関係『文部省往復』件名目録（昭和12～20年）」として発表しており有益であるが<sup>3)</sup>、やはり「目録」および内容の抄録のみでは、他大学の研究者が十分に活用できる状態であるとはいえない。また明治大学のケースでは、明治大学史資料センター所蔵の公文書類の一部が、『戦争と明治大学』（学校法人明治大学、2010年）に史料として掲載されているが、目録といった形式がとられているわけではないので、史料の残存状態の全容も外部には伝わりにくい。

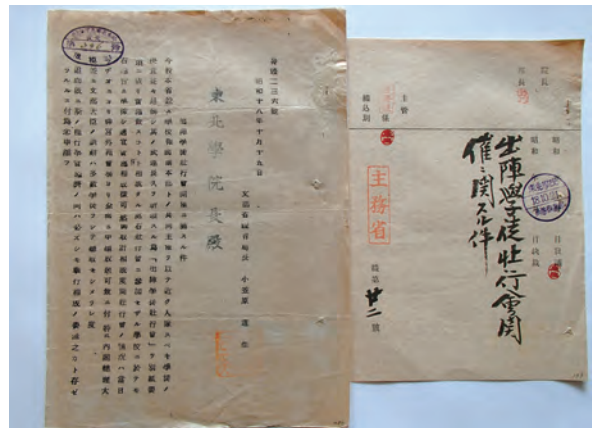
二点目は調査の目的である。『戦争と明治大学』においては、その冒頭において「本調査の元来の目的は、はっきりしている。それは、太平洋戦争（1941年12月から1945年8月まで）において戦死した明治大学出身者を調査することである」とされているように、事実上、学内関係者に向けた内容となっている。また、先述のように東京大学のケースにおいては他大学の事例調査の結果なども記載されているが、それでも調査の目的は、東京帝国大学時代の在籍学生の出陣数、戦没者数の確定に向けられている。無論、大学あるいは法人が調査費用を出している以上、そのこと自体が非難されることではない。だが各大学に残された貴重な史料群は学内関係者のみにとって有益なものではなく、各大学に残された断片的な史料群をつなぎ合わせてこそ、各大学史を超えた研究が可能になるといえよう。

『東京大学の学徒勤労働員・学徒出陣』においても、『九州大学五十年史』や『東京大学百年史』を例と

して、学徒出陣に至る大学側の対応などが明らかになっていないことが、今後の課題だと指摘されているが<sup>4)</sup>、東北学院大学も含めて、各大学でもその後の研究が精力的に進んできたわけではなかった。無論、かならずしも公人とは言い難い、大学関係者や在学生・卒業生のプライバシーは十分に配慮されなければならない。だが史料的価値にかんがみて、東北学院においては所蔵する文部省との往復公文書などを出来る限り、影印版のような形で公開していればと願っている。本稿ではつぎに、そのための下準備として、現在までに存在が確認できた学徒勤労働関係史料の一部を公開していきたい。

### 3. 史料紹介

1943年10月1日、政府は「在学徴集延期臨時特例」（勅令第755号）を交付し、理工系と師範系を除く文科系高等教育機関在学生の徴兵延期措置を撤廃し、10月25日から11月5日にかけて徴兵検査を実施し、甲種及び第一・第二丙種合格者は12月に入営・入営させることになった（第三種丙種合格者は補充兵役、丙種合格者は国民兵役に編入し召集）。



史料1-1 「出陣学徒壮行会開催二関スル件」（発體236号、昭和18年10月19日、文部省体育局長小笠原道生発、東北学院宛）東北学院所蔵『主務省関係書類類』第22号、以下『主務省綴』と省略。



史料1-2 同上史料続き





史料1-3 同前史料のつづき

史料1にあげた史料は、かの有名な明治神宮外苑競技場で1943年10月21日に行われ、7万人を集めた出陣学徒壮行会の開催を告知するために東北学院に送付されたものである。日本放送協会が実況中継を行い、のちに映画ともなったこの壮行会は、史料1-3にもあるように、東京、神奈川、埼玉、千葉県下の高等教育機関の学生のみを対象としたものであったが、「右壮行会ニ参加セザル学校ニ於テモ右趣旨ニ準拠シ適宜実施相成様可然御取計相成度」と、各学校においてもこれを参考として壮行会を実施するように通達されていたことも確認できる。そして東北学院において実際におこなわれた壮行会の姿を伝える貴重な写真が次に掲げるものである。



東北学院資料室所蔵「学徒出陣壮行会」（提供者高橋雄太郎氏、昭和19年9月高商）。礼拝堂正面のキリストの昇天を描いたステンドグラスは覆われ、国旗が掲揚された。

続いて紹介する史料2は、いわゆる学徒兵として入営・入団する学生に対する学校側の対応を明示した文部省からの通知である。そこでは入営・入団学生に対しては「服役期間中休学ノ取扱ヲナシ」、1944年9月に卒業の見込みがある場合には、「本年十一月ニ於テ仮卒業証書又ハ仮修了証書等ヲ授与シ明年九月ニ於テ卒業又ハ修了セシムルコト」とされ、除隊後に「補講ヲナスコト」とされていたが、事実上の繰上げ卒業を学校側に強いるものであったこと



史料2 「昭和十八年臨時徴兵検査ヲ受クベキ学生生徒ノ取扱ニ関スル件」（発専241号、昭和18年10月19日、文部次官発、東北学院長宛）『主務省綴』

がわかる。

史料3は文部省の依頼に応じて提出された文書の草案であり、1943年10月段階での東北学院からの徴兵検査受験者数がわかる貴重な資料である。「今回徴兵受験者」数は、昼間主学生が第一学年37名、第二学年78名、夜間主学生がそれぞれ35名、49名となっている（後述するように、この人数自体は後に文部省に報告された史料4と一致しておらず、人数の確定のためには、今後の史料批判が必要である）。注目に値するのは同時に作られたと考えられる史料3-2左側の史料である。



史料3-1 「徴兵受験者数等ノ件」（高学発第1515号、昭和18年10月26日、東北学院長発、文部省専門教育局長宛）『主務省綴』

史料3-2は「其筋ヨリノ通牒ニ依リ報告並ニ須要ニツキ至急御調査御記入相成度」とあり、各学年に設けられた一組から三組までの「組主任」に詳細な報告を求めたものである。当然のことながら、「其筋」という言い回しからみても、これが文部省からの「通牒」ではないことは明らかである。これは入営者が所属することになる「仙台師団」（第二師団・第十三師団）からの通牒であった可能性が高い。本来行政的な意味での命令・指揮系統にはないはずの軍から学校組織への指示を示す事例として興味深い。

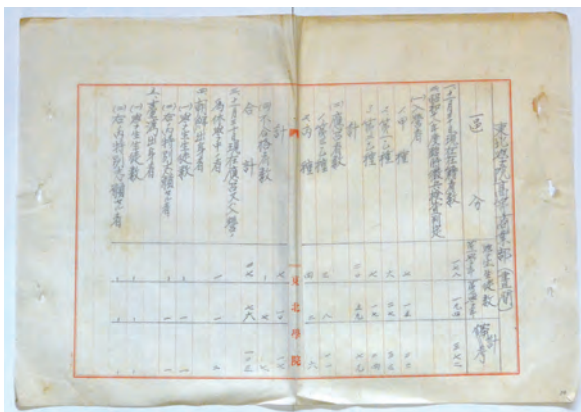


史料3-2 同上続き

それでは実際に昭和18年度臨時徴兵検査を受けて戦地に赴いた本学学徒は何名だったのか。それを示すのが下記の史料4である。

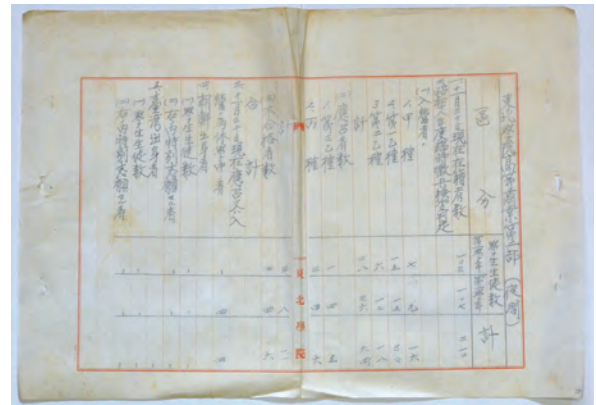


史料4-1 「昭和18年度臨時徴兵検査判定等二関スル件」(高学発第1622号、昭和18年12月9日、東北学院長宛、文部省専門局長宛) [主務省綴]



史料4-2 同上史料続き

この数値も文部省に提出された草案に掲載されたものであり、厳密な数値か否かは今後さらに別の史料などからクロスチェックが必要である。だが現段階で明らかとなっている人数は、1943年11月30日現在の昼間主在学者第一学年178名、第二学年194名中、入営者がそれぞれ20名、59名、応召者7名、10名、夜間主では第一学年103名中、同第二学年



史料4-3 同上史料続き

107名中、入営者がそれぞれ28名、36名、応召者3名、8名であった。

よって昼間主372名中ほぼ確実に戦地に赴いた入営者が79名、夜間主210名中では入営者は64名となり、1943年12月時点での昼間・夜間主を併せた在学生582名中の143名、約24パーセントである。これに戦局の悪化と共に召集された可能性が高い応召者(昼間主17名、夜間主11名)を加えると、約29パーセントの学生が学徒兵として出陣していた可能性が高いと考えられる。

今後は本学所蔵史料のさらなる精査とともに、他の高等教育機関との比較など、やるべき課題は山積みであるが、幸いにして2014年4月には東北学院史資料センターが発足する予定である。紙数の関係で今回は紹介できなかった史料も含めて、今後も継続的に作業結果を公開していきたい。

<sup>1</sup> このような徴兵猶予の短縮自体は、1942年9月にはすでに陸軍内部では検討されていることが確認でき(石川準吉『国家総動員史 資料編 第八』国家総動員史刊行会、1979年)、1941年10月には大学・専門学校の在学年限または修業年限の臨時短縮が決定され、1941年度学部卒業予定者は三か月の繰り上げ卒業対象者となった。これをもって学徒出陣の開始とみなすとらえ方もありえる。(明治大学史資料センター『戦争と明治大学——明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員——』学校法人明治大学、2010年)。

<sup>2</sup> このような事例は決して珍しいことではなく、たとえば大東亜省の記録類は終戦時に破棄され、まとまった簿冊類は全く存在していない。

<sup>3</sup> 「学徒動員・学徒出陣関係『文部省往復』件名目録(昭和12~20年)」(中野実解題『東京大学史紀要』第15号、1997年3月)。

<sup>4</sup> 東京大学史資料室編『東京大学の学徒動員学徒出陣』(東京大学出版会、1998年) 29頁。

河西 晃祐プロフィール KAWANISHI, Kosuke  
1972(昭和47)年生まれ。  
上智大学文学研究科博士後期課程修了。  
立命館大学非常勤講師、東北学院大学講師・  
准教授を経て現職。



# 東北学院時代の森本厚吉

東北学院大学経済学部教授

仁昌寺 正一

仙台育英学園高等学校教員

雲然 祥子

## はじめに

女子経済専門学校（現・新渡戸文化学園）の創設などで知られる森本厚吉（1877-1950）は、1901（明治34）年8月から1903（明治36）年7月までの約2年間、つまり24歳から26歳にかけて、東北学院で教鞭をとっていた。この間、森本は教員としてどのような生活を送っていたのだろうか。またこの2年間が彼の生涯の中でどのような意味を持っていたのだろうか。これらの点を検討してみることが本稿の課題である。



森本厚吉  
（新渡戸文化学園提供）

とはいえ、ここで使用しうる史料は限られている。東北学院が発行した『東北学院理事会記録』、『私立東北学院普通科教員会記録』、『東北学院百年史』のほか、『河北新報』の記事などに散見される断片的な記述を利用しすぎるにすぎない。したがって、森本厚吉の事績をまとめた森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』（河出書房、1956年12月）に、これらの史料にみられるわずかな記述をつけ加えるという作業にならざるをえない。

ところで、ここで予め言及しておきたいのは、森本が赴任した1901（明治34）年当時の東北学院の状況についてである。この年、東北学院には、仙台神学校としてスタートとした1886（明治19）年以来の画期的な事件が起きていた。その一つは指導部の変更である。森本の東北学院への就職が決定したのは1901年8月であったが、同年4月に、それまで東北学院を支えてきた三校祖のうち、当時、学院長を務めていた押川方義と、副院長のW.E.ホーイの2

人が諸般の事情によって相次いで辞任し、D.B.シュネーダーが2代目の院長に就任したばかりであった。もう一つは、同年5月に文部省に提出した徴兵猶予の申請をめぐって、同省との緊迫した交渉が行われていたことである。もしこの申請が受理されなければ、東北学院の今後の発展はほとんど望めない事態になっていた。というのも、5年制教育を行っていた東北学院の普通科から、徴兵猶予資格の特権を持っていた官立中学校に移っていく学生が多かったからである。この申請に対しては、文部省から、官立中学校と同じような教育体系の整備（教育理念の明確化、カリキュラムやスタッフの充実など）を行うことを強く求められていたのである。ともあれ、森本の東北学院への赴任は、このような大きな事件が相次いでいる最中のことであったことに留意しておく必要がある。

## 1. 森本厚吉の足跡

まず、森本厚吉の経歴を、ごく簡単にたどってみることにしよう。

森本は、1877（明治10）年3月2日、京都府舞鶴田辺に増山純一郎の三男として生まれた。前掲『森本厚吉』（以下、『森本厚吉』とする）によれば、「幼少の頃はなかなかの暴れん坊であったらしく、男四人、女二人の兄弟と一緒に、海辺で楽しい腕白生活を送っていた。先生（森本厚吉のこと……引用者）は『浜っ子』として水泳に熟達し、また子供ながら舞鶴名物『いさぎ』を川で漁することもうかった。その頃は舞鶴浜でとれる雑魚小魚が毎日のように食膳に上っていたので、老後も昔の小魚の味が忘れられず、さしみや切身よりも小あじやいわしの煮つけを求めることが多かった」（4ページ）という。

その後、1892（明治25）年9月に東京英和学校普通科に入学し、1894（明治27）年6月に同校卒業。同校では英語を学びつつ、札幌農学校で教えていた



新渡戸稲造の思想に傾倒していく。そのことから、いずれ札幌農学校に進むために、1894年9月には札幌の私立北鳴学校5年級に編入学し、翌1895（明治28）年3月に同校を卒業した。同年の7月には、森本活造の養子となるとともに、札幌農学校予科4年に編入学し、ついに尊敬する新渡戸から直接教えを受けることとなった。このとき、森本は18歳であった。そして1897（明治30）年7月には、札幌農学校本科に入学した。

札幌農学校での学生生活で特筆すべきことは、同じく新渡戸を慕って札幌にきていた有島武郎と親交を深めたことである。在学中には、キリスト教を信仰することの意味について語り合ったという。また卒業時には2人で『リビングストーン伝』を著し、これを新渡戸に捧げたことはよく知られている。こうして森本は、1900（明治33）年11月18日には札幌独立教会で受洗、キリスト教徒として生きることを決意する。

1901（明治34）年7月に札幌農学校を卒業し、同年8月には仙台市にある私立東北学院に教授として赴任した。東北学院では約2年間、歴史地理などの教鞭をとるが、1903（明治36）7月にはアメリカへ留学するために依願退職した。そして同年9月には、アメリカ合衆国のジョンズ・ホプキンス大学大学院に入学した。そこでは経済学及び歴史学を専攻していたが、1905（明治38）年10月に退学した。その後、1906（明治39）年8月下旬の帰朝までの約9か月間、ボストン市やシカゴ市などの講演協会講師となり、アメリカ国内で29回にも及ぶ講演を行った。その後、日本に帰国し、1907（明治40）年9月、当時札幌にあった東北帝国大学農科大学予科大学教授に就任するとともに、山角静子と結婚した。翌1908（明治41）年6月には、東北帝国大学農科大学助教授に就任した。

森本は、同大学でしばらく教鞭をとっていたが、1915（大正4）年11月、経済学及び財政学の研究のために、再びアメリカ合衆国ジョンズ・ホプキンス大学大学院に留学し、翌年9月には、同大学大学院より「ドクトル・オブ・フィロソフィー」の学位を授与された。帰国後の1918（大正7）年8月には、官制改正により東北帝国大学農科大学から名称変更した北海道帝国大学農科大学の教授となった。

その後、森本は教育活動に専念する一方で、1920（大正9）年、文化生活研究会を組織し、文化生活運動に取り組むようになっていった。1926（大正15）年12月には新しい集団住宅の紹介・普及をねらいとして「文化アパートメント」を東京に開

館した。また翌1927（昭和2）年2月には、理想的な女子教育を行うべく女子文化高等学院を創設した。これがのちに女子経済専門学校を経て東京文化学園（現・新渡戸文化学園）へと発展することになる。森本は、北海道帝国大学農科大学の教授も務めていたが、1932（昭和7）年、多忙のため同大学を辞職し、女子経済専門学校での教育に専念することとなる。

それ以降、森本は同校の教育活動に尽力するが、1949（昭和24）年2月、脳溢血のため倒れる。その後、一時回復するが、1950（昭和25）年1月31日、永眠。享年73才であった（以上の記述にあたっては、前掲『森本厚吉』、及び日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年2月）などを参考にした）。

さて、このような経歴を持つ森本であるが、森本と交流をもっていた人々は彼についてどのようなことを述べていただろうか。一例であるが、1932年から数年間、女子経済専門学校の講師を務めていた鈴木義男は、後に次のように語っている。

授業の前後には先生（森本厚吉のこと……引用者）と一緒にお茶をいただくことも多かつたし、またときどき教師学生膝を交えて、ティー・パーティーをやって歓談を共にすることも多かつたから、お互によく知ることも出来、人格的な接触と理解を通して、本当の交友感を味わうことができたものである。生涯のうちにその頃がなつかしく思い出される一時期である。それが主として先生の温かい人格と結びついているのである。（前掲『森本厚吉』、642ページ）

森本が「温かい人格」の持ち主であったことは、鈴木以外の多くの人も認めるところであった。

また、鈴木は、日本の近代史における森本厚吉の業績について、次のように評価している。

私は二つの点で、先生（森本厚吉のこと……引用者）がわが国文化のために残された功績を高く評価している。一つは文化的生活というものをわが国民に啓蒙されたことである。今でこそ誰も彼も文化文化というけれども、三十年前のわが国においては、外国にでも遊んだ少数の人々を除いては、文化の意義すら理解するものは少なかったのである。人間が動物と異なるところがあるとすれば、ただ偏に文化をもっている点にあるといっても過言ではないと思う。そしてこれくらい、広く深い内容をもった概念もないのである。先生御夫妻の努力はいかにして

蒙昧な野卑な人間に値しない生活しか知らないわが国民に、人間に値する生活内容を開眼しようかというところに向けられていたわけである。先生は一方教育によってこれを達するとともに、他方実践を通して開示されたのである。当時群盲模象的批評が相当あったけれども、先生は毫もこれに屈することなくその道を行かれ、ついに開拓者としての氏名を果たされたように思う。日本国民は最初に文化生活の意義と内容とを示された人を長く忘れてはならないと思う。

今一つの貢献は、今述べたことと一体をなすのであるが、婦人の教育に新生面を開かれたことである。私は三十数年前に欧米に遊んで三年間滞在して、わが国に欠けたものがあるとすれば、それは男子の文化だけであって、婦人文化のないこと、女子を隷役の地位に置いて、対等の人格価値を認めないところに、わが国文化の片輪と貧相とがあるということを感じたのであった。なるほどその点に着眼して、既に日本女子大学や東京女子大学も創始されたのであるが、その教育は理論と知識の啓発に偏して、実生活そのものの昂揚という点に欠けるかの観があったのである。これに対して先生の始められた女子教育は、文化生活を新日本の女性に体得させるところの眼目があったのである。きわめて知性高く、情操豊かで、しかも実地的な主婦と母を作り出すことであった。新憲法は男女の完全な人格的対等と両性の相互敬愛扶助の原則を社会生活、家庭生活の根本指標として啓示したのであるが、これは三十年前に森本先生が決意され、実践に移された理想であったわけである。〔『森本厚吉』、643-644ページ〕

このように、森本の最大の功績は、日本において「文化的生活というものをわが国民に啓蒙されたこと」や「婦人の教育に新生面を開かれたこと」であったと述べている。その後の森本の生涯に鑑みれば、この評価は的確であるといえるだろう。

## 2. 東北学院所蔵史料にみる森本厚吉

すでに述べたように、森本は1901年8月から1903年7月までの約2年間、東北学院で教鞭をとっている。ここでは、東北学院に所蔵されている史料、とくに『東北学院理事会記録』と『私立東北学院普通科教員会記録』に依拠して、この間の森本の動向をみてみたい。

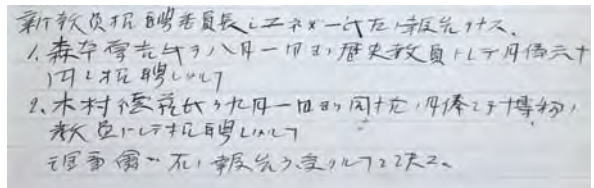
なお、この時期の『東北学院理事会記録』には2種類あることに注意しておかなければならない。一つは、東北学院の教員であり理事にもなっていたクリストファー・ノッスが書記を務めた『東北学院理

事会記録』である。もう一つは、笹尾糸太郎が書記を務めた『東北学院理事会議事録』である。これらの中身を検証してみると、文章や表現のちがいが見られるものの、同日に開かれた理事会の会議の同じ内容の記録が書かれていることが確認できた。ここでは、主に笹尾の書いたものを引用するが、ノッスによる記述も適宜紹介することとする。

### (1) 『東北学院理事会記録』から

『東北学院理事会記録』をみると、1901年頃の東北学院理事会は、月一回のペースで院長室で開催されていた。理事会のメンバーは、毎回の出席者から判断すれば、院長（D.B.シュネーダー）、幹事（斎藤壬生雄）、A.K.ファウスト、梶原長八郎、笹尾糸太郎、クリストファー・ノッス、ポール・ゲルハルトの7名であった。

この史料によれば、森本の名前が出てくるのは、1901（明治34）年9月7日の午前9時から開催された臨時理事会においてである。2回名前が出てくるが、1回目は次のように記述されている。



新教員招聘委員長シュネーダー氏、左ノ報告ヲナス

1. 森本厚吉氏ヲ八月一日ヨリ歴史教員トシテ月俸六十円ニテ招聘シタル事
2. 木村徳蔵ヲ九月一日ヨリ同格月俸ニテ博物ノ教員トシテ招聘シタル事

理事会ハ右ノ報告ヲ受クル事ニ決ス（『東北学院理事会議事録』）

この記述から、森本が札幌農学校の卒業直後の8月1日付で東北学院の教授（「歴史教員」）に就任したことがわかる。なお、上述のように、森本よりちよど1か月遅れて、同じく札幌農学校の卒業生であった木村徳蔵も「理科教授」（『東北学院理事会議事録』）に就任している。

2回目は、次のように記述されている。

森本氏ヲシテ、左ノ諸学科ヲ受持タシム事ニ決ス

日本歴史地理、外国地理並ニ西洋歴史、地文学、天文学、文明史（『東北学院理事会議事録』）

森本は、歴史と地理のほか、それらに関連するいくつかの科目も担当することになっていた。

こうして、森本の東北学院での教員生活がスター





ていたことがわかる。例えば、同年9月27日に開催された臨時理事会では、

森本氏ノ請求ニ関スル日本模形地図、其ノ価三十九円、且ツ木村氏ノ請求ニ関シタル標本、其ノ価百三十三円ヲ買入ル、事ヲ許可シ、会計ヲシテ右購入セシムル事ニ決ス（『東北学院理事会議事録』）

となっている。この購入はその後スムーズに行われ、同年12月29日の理事会で「院長（シュネーダーのこと……引用者）ヨリ、博物標本ヲ百五十七円七十五銭ニテ買入レタル事並ニ地理模形図ヲ三十九円ニテ買入レタリトノ報告アリ、之ヲ受クル事ニ決ス」（『東北学院理事会議事録』）と報告されている。

1902（明治35）年3月24日の午後4時から開かれた臨時理事会の中では、

院長ヨリ、左ノ教授受持変更ヲ報告ス

森本氏、入江氏ノ受持ナリシ経済学ヲ引受ク  
木村氏、森本氏ノ日本地理歴史ヲ引受ク  
芳賀代助氏、木村氏ノ物理化学ヲ引受ク  
同氏、田中氏ノ数学ヲ補佐スル事（『東北学院理事会議事録』）

となっている。入江祝衛の辞職にともない、彼が担当していた経済学を担当することとなり、それまで森本が担当していた日本地理歴史を木村が担当することとなるのである。なお、このとき木村は「理化<sup>(マ)</sup>の担任解除の請求」を行ったという（『東北学院理事会記録』）。

1902年4月1日に開かれた理事会（同年3月28日に開かれた定期理事会の継続会）において

次ノ規則ヲ採用スル事ニ可決

（一）各学年ノ始メニ於テ理事会ハ全学院教授中ヨリ各級ニ一ノ級長ヲ撰ブ事、級長ノ義務ハ院長並ニ教頭ト生徒ノ間ニ立チ、両者ノ意見ヲ相疎通セシメ傍学生ノ学力並ニ品性ニ就テ報告シ、且ツ各生徒ノ日常ノ品行ヲ監督スルモノトス、本学年ノ級長ヲ左ノ諸氏トス

五年 ファウスト  
四年 森本  
三年 福沢  
二年 木村  
一年A 田中  
一年B 中村（『東北学院理事会議事録』）

となっている。ここでいう「級長」とは、今日でいう学級担任のことであろう。この決議をみると、森本は4年生（第4学年）の「級長」を務めていることがわかる。

そのようななか、1902年9月9日の臨時理事会では、次のような決議がなされている。

森本氏ノ請願、即チ毎日一時間マテ憲兵本部ニ於テ英語ヲ教授シタトキノ事ニ関シテ、理事会ハ同氏ノ精神ニ同情ヲ顯ハスモノナレトモ、学校外ニテ教授スル事ハ、既ニ理事会ノ決議トシテ許可セザル事ナレバ、同氏ノ請願ヲ許可セザル事ニ決ス（『東北学院理事会議事録』）

五、森本教授より、憲兵隊に於て英語を教授する許可を出願せられたるにつき、審議の結果、先に教員の他校に兼務する件ニ関して決議したところに基づき、同氏には甚だ気の毒ながら之を拒絶する事に決す（『東北学院理事会記録』）

これを見るように、森本は東北学院で教育に専念する一方で、「憲兵本部」（『東北学院理事会記録』では「憲兵隊」）で英語を教えようとしている。この請願は、理事会の決議により「許可セザル事ニ決ス」（同じく「拒絶する事に決す」）ることとなるが、すでに上梓した『リビングストン伝』の著者としての評判からこのような依頼があったのかもしれない。

その後、『東北学院理事会議事録』、『東北学院理事会議事録』ともに森本に関する記述はしばらく見られないが、1903（明治36）年4月2日の定期理事会（同年3月27日の理事会の継続会）に関する『東北学院理事会議事録』に次のような記述が出てくる。

一、シュネーダー氏、委員を代表して、次の如く組主任の候補者を報告す

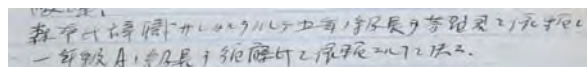
一年A 芳賀氏 一年B  
二年 田中氏 三年 梅津氏  
四年 出村A 五年 森本氏  
文一 ゲルハード氏 文二<sup>(マ)</sup>、ファウスト氏  
動議ニ依り、推薦の通り選任せらる。（『東北学院理事会記録』）

このように、森本はもちあがりというかたちで5



年生の「組主任」を担当していることがわかる。

しかしながら、1903年7月6日に開かれた理事会では、



森本氏辞職サレタルヲ以テ、五年ノ級長ヲ芳賀君ニ依頼シ、一年級Aノ級長ヲ須藤氏ニ依頼スル事ニ決ス（『東北学院理事会議事録』）

と記述されている。辞職について森本がいつ意思表示をしたかは定かではないが、同年5月28日に開かれた理事会では、教員招聘委員のひとりであるシュネーダーが「歴史教授」の招聘に関することを報告していることに鑑みれば、4月から5月の間に何らかの動きがあったものと思われる。

なお、森本の辞任に関しては、1903年7月1日の『河北新報』が、「森本農学士の米国遊学」という見出しで、「東北学院教授同氏は米国バルテモア市ジョンス、ホプキンス大学に経済、歴史を研究せんため近々渡米の趣なるが、来る七日、当市を出発し東京に準備を整ひ、八月頃横浜解纜の予定なる由、従て来学期より同学院教授中に多少の異動あるやに聞く」と伝えている。

かくして、森本は、1903年7月までに東北学院を辞職し、アメリカへ留学することになる。

## (2) 『私立東北学院普通科教員会記録』から

次に、『私立東北学院普通科教員会記録』における森本の動きを追ってみることにしよう。

この『私立東北学院普通科教員会記録』は、東北学院の普通科所属の専任教員の会議に関する記録である。この会議は、1か月に1回のペースで、午後7時からシュネーダー院長の自宅で開催されていた。1901年9月9日に開会された会議の開始時の様子は、次のように記述されている。

明治三十四年九月九日午後七時、ファウスト、ランペ、五十嵐、前田、深田、小泉、福沢、シュネーダー、伊藤、入江、梶原、笹尾、森本、木村、中村の諸氏出席、笹尾氏の祈りにて開会す

さて、この史料から森本に関する記述をピックアップしてみると、二つのことが明らかになる。

一つは、森本が、東北学院に赴任中、この会議にほとんど出席しているということである。表-2は、そのことを確認するためにあえて作成したものであるが、彼の赴任中の1934年9月から1936年7月までの間に開催された27回の会議のうち、25回に出席していることがわかる。

表-2 森本厚吉の普通科教員会への出席状況

普通科教員会の開催年月日・開会時間	森本厚吉の出席状況
1901(明治34)年 9月 9日・午後7時	○
10月13日・午後7時	○
11月11日・午後7時	
12月 7日・午後7時	○
12月23日・午後7時	○
1902(明治35)年 1月 7日・午後7時	○
2月10日・午後7時	○
3月10日・午後7時	○
3月22日・午前8時半	○
3月29日・午後7時	○
4月 9日・午後7時	○
4月29日・午後7時	○
6月10日・午後7時	○
7月 9日・午後7時	○
9月10日・午後7時	○
10月 7日・午後7時	○
11月10日・午後7時	○
12月10日・午後7時	○
1903(明治36)年 1月 7日・午後4時	
2月 4日・午後7時	○
3月 2日・午後7時	○
3月20日・午後7時	○
3月27日・午後7時	○
4月11日・午後7時	○
5月 4日・午後7時	○
6月 1日・午後7時	○
7月 9日・午後7時	○

資料：『私立東北学院 普通科教員会記録 二(自明治三十三年四月至同三十四年四月)』より作成。

もう一つは、赴任中、講義以外にもさまざまな仕事をこなしていたことである。以下、この史料にみられる記述を列挙してみよう。

1901(明治34)年12月7日には、「一、院長より入江、森本、前田三氏を点数計算委員に嘱託す」と記述されている。点数計算委員の内容は不明であるが、入江、前田とともに、同委員を務めたことがわかる。

1902(明治35)年3月10日には、「卒業式委員」を委嘱され、ランペ、小泉、笹尾とともに、「装飾委員」となっていたことが記述されている。卒業式当日の会場の飾りつけなどを行っていたのであろう。

1902(明治35)年4月29日には、「一、森本、木村両氏に三十分を期限として行軍中講演を乞ふこと可決」と記述されているほか、同年7月9日には、「一、中村氏が書記候補者として、田中、森本、五十嵐三氏を指名し、投票の上、田中氏多数にて当選、承諾す」という記述がみられる。

翌1903(明治36)年3月20日には、同日の教員会の出席者が列記されたのち「森本氏祈祷ス」と記述されている。この会の開会の祈祷も行っていたことがわかる。

また、同年3月27日には、「書記代理 森本」となっており、このような仕事も行っていたことがわかる。

### 3. 熱心な教師であった森本厚吉

では、東北学院時代の森本厚吉は、どのような教師だったのだろうか。これについては、森本の講義を聴いた当時の東北学院生の卒業生の記述を中心にみてみよう。

まず、東北学院から旧制二高、東大に進み、やがて聖路加病院の院長になった橋本寛敏は、当時を次のように回顧している。

私が初めて森本厚吉先生を知ったのは、今から五十年ばかり前、一九〇二年の春だった。私は仙台に生まれたが、そこに東北学院というキリスト教主義の学校があった。

母が熱心なキリスト教信者だったので、中学に入る年になった私は、その普通科に入れられた。

入学してみると、そこに新しく来た先生として森本先生が居られた。先生はその年北海道の札幌農学校を卒業し、渡米留学の準備のために、この小さい学校の教員になられたのであった。

森本先生はリビングストーン伝を書いたばかりで、信仰に燃え、雄弁を振って、常に若い学生の心を捕え、人気を一身に集めた。私は地理の時間に先生の教えを受けたのだったが、未だ子供だから、高等学部の学生のように先生の大演説に聴きほれたのでもなく、また先生の主張を充分理解したのでもなかった。しかし先生の純真でしかも強い精神は、子供心にもわかるもので、何となく先生が好きで、独身生をしている先生の宿にしばしば遊びに行った。先生の家は仙台の西北端、広瀬川の清流に臨む高台にあったが、先生は数人の学生をつれ、よく散歩し、いろいろと気焔をあげた。或日夜更けるまで先生の家に遊んで、暗い夜道を帰る時、堀に落ちて、前歯を欠いた。それから今でも二本の義歯をとどめて、私の体のなかにある先生の想出となっている。（『森本厚吉』、633ページ）

また、東北学院と卒業後、カリフォルニア大学に学び、以後、日米のいくつかの教会において牧師を歴任してきた小平国雄は、森本が行った歴史の授業について、「教育の基本である精神教育、人格教育の真諦を東北学院教授時代にわれわれに打込まれたことは、当時親しくその人格に触れた筆者には、今なお強く生きているのである」（『森本厚吉』、673ページ）としつつ、次のような興味深い証言をしている。

筆者が学院在学中、尤も深く感化を受けたのは、森本先生の「スウィントン万国史」の講解であった。

先生は普通ありふれた講義風で教えるのではなく、自ら歴史中にある人物そのままを演出する処に異風があった。ローマ古代史の中心人物ジュリアス・シーザーを教える時などは、「君等はシュネーダー院長にかくしたことを話してならないぞ」と、学生を口留して文豪シェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」のドラマを教室に持ってこられて、情熱をこめて演出されるので、筆者は吸い込まれる様に引きつけられたものだ。ローマの議事堂で、シーザーが議長席に着席していると、反逆者にキャスヤスとキャスカが、シーザー暗殺を計画し愈々剣を抜いてシーザーに向うた時、シーザーも剣を取って対抗した。そしてシーザーは親友ブルータスだけは味方だと思っていると、ブルータスが剣をもってシーザーに向うてくるのを見て、シーザーは非常に失望して、剣を棄ててトーガー（ガオン）をもって、顔を被い、ブルータスの剣に倒れた。その結果ブルータス一派が街頭の公会所の壇上に立って、「われらは何故にシーザーを殺したか」を弁明すると、ローマ市民はこれに拍手を送る場面など、まるで目の前に見る様な実演をされる。その後、この急を聞き、アントニーが同じ壇上に立って、ブルータス一派の詭計を反バクすると市民はこれにまた拍手を送る。当時のローマ市民は付和雷同するのみであった。その結果マケドニアのピリピの野に於て、ブルータスとアントニーの決選となり、ブルータスは敗れアントニーの天下になるのであるが、森本先生はドラマそのものの中に、自ら史中の人物となって熱意をこめた雄弁で汗をふきつつ講演されたのである。（『森本厚吉』、670ページ）

歴史学の授業風景がどのようなものであったのかが伝わってくる一文である。ここからもわかるように、森本は、新進気鋭の情熱的な教育者として、受講生の興味・関心を深めていくようなユニークな授業を行っていたのである。

### 4. その後の森本厚吉と東北学院との関わり

森本厚吉の約2年間の東北学院での教員生活は、直接間接に、その後の人生にプラスとなるものが多かったようである。以下、そのことに関するいくつかの記述をみてみよう。

一つは、ジョンズ・ホプキンス大学の大学院を退学した1905（明治38）年10月から翌年8月に帰国するまでの間、講演会を行いながら生活をしていたときに、彼の講演がアメリカ国民に好感を持って迎えられ、「講演の報酬で一時的にせよ生活が潤った」という。ちょうどそのころ、かつて東北学院の教員



であったクリストファー・ノッスが1903（明治36）年に帰米し、ランカスター大学の神学校の組織神学教授になっていた（前掲『東北学院百年史』、702ページ）。ノッスは、アメリカの新聞に「森本教授は好評のリビングストーン伝の著者である。私は氏を東北学院時代から知っているが、優れた性格の持ち主である。非難すべき点もない私生活、神を説くための絶えざる準備、印象深い説教などはキリスト教え信者としての氏の行動である」（『森本厚吉』、30-31ページ）という評価を掲載したという。森本の人柄も関係していたのであろうが、このような支援者がいたこともプラスになったであろう。

また、1915（大正4）年秋からの2年間、文部省派遣の消費経済学研究を目的とする国費留学生として、再びアメリカ合衆国ジョンス・ホプキンス大学を訪れた際には、東北学院長シュネーダーの世話になっている。森本はこのとき、妻と子供2人を随行しての留学であった。1915年9月に外国船で出発し、サンフランシスコに着き、やがてジョンス・ホプキンス大学のあるボルチモアに到着したが、ここでは、帰国中のシュネーダー一家に迎えられ、あらかじめ用意されたユートー街のアパートに案内された。それから2、3ヶ月後には、パターソン街にあるシュネーダーの邸宅に同居している。やがて、シュネーダー夫妻は仙台の東北学院に戻ることになったが、その際、商業学校の生徒だった末娘のクララの世話を森本たちに托していった（『森本厚吉』、36ページ）。このようなことは、かつての東北学院で結ばれたの深い信頼関係があったからこそ、可能であったことはいうまでもない。

さらに、森本が帰国したのち、札幌で医師となった橋本寛敏との再会があり、これ以降、橋本と森本との生涯にわたる親交が結ばれたことである。このことについて、後に橋本は次のように回顧している。

私はそのうちに、仙台の第二高等学校を経て東京の帝国大学に入り、医学を修め、一九二一年内科医になって、札幌病院の医長に赴任した。札幌に着いてみると、十八年ぶりだ森本先生に再会した。先生は新渡戸先生の後を継いで、農業経済の講義を北海道大学でして居られたが、それまで、北海道の農民の低い生活水準の研究を積まれていた。それが緒となったのだろう、日本人の生活の研究に興味をもたれ、是非ともこれを改善しなければならぬと唱えられた。……（略）……その頃の先生は先生の一生涯のうちで、最も脂の乗った時代だと思うが、実に盛んな活動をされて世の中の注目を集めた。私も医

者として忙しく働くのだったが、先生と私の交際は仙台時代の再現であった。雪の夜にストーブを囲んで無駄話をしたり、春が来れば二人で馬に乗って札幌の平原を走り廻ったり、夏になれば銭函の海で競泳したりするのだった。……（略）……そのうち私もアメリカに渡り、先生と同じジョンス・ホプキンス大学で研究をして来た。二年過ぎて東京に帰ってみると、先生は既に東京に移転され、先生の持論を実行に移して居られた。（『森本厚吉』、634-635ページ）

やがて橋本は、森本厚吉の死亡（1950年）の翌年、森本の事業を引き継ぐかたちで、東京文化学園（現・新渡戸文化学園）の理事長に就任している。そして、1962（昭和37）年には、同学園内に森本厚吉の銅像を設置している。

これら以外にも、森本と東北学院との関わりを示す事例はあるが、これらだけでも森本が教育者としての第一歩をふみ出すこととなった東北学院での経験が、その後の彼の人生に大きな意味を持つことが確認できるだろう。

## おわりに

以上、東北学院で所蔵しているごくわずかな史・資料を手がかりにして、東北学院時代の森本厚吉の足跡を明らかにする作業を行ってみた。

これまでみてきたように、森本が仙台の東北学院に赴任した大きな理由の一つは、徴兵猶予の特権を獲得すべく歴史地理担当の教員を是非とも必要としていた東北学院の要請に応えようとしたためであった。むろん、これ以外にも、本文ですでに述べたように、東北学院がミッションスクールであったことなども考えられよう。

総じて、東北学院での2年間の教員生活は、以上で述べてきたようなさまざまな体験によって、それまでの森本の知識の幅や関心を大きく広めることになったことは疑いない。また、ここで出会った生徒や同僚とのつながりは、その後の人生での交流の深さを考えれば、森本の人生にとって極めて大きな意味を持つものであったといえるだろう。

**謝辞** 本稿に掲載の森本厚吉の写真は、新渡戸文化学園の新渡戸・森本研究所所長の森本晴生先生より提供していただいたものです。ここに記して感謝申し上げます。

仁昌寺 正一プロフィール NISHOJI, Shoichi

1950(昭和25)年生まれ。  
東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学。  
東北学院大学経済学部助手・講師・助教授を経て現職。

雲然 祥子プロフィール KUMOSHIKARI, Sachiko

1985(昭和60)年生まれ。  
東北学院大学経済学部卒業、東北学院大学大学院経済学研究科博士前期課程修了、同博士後期課程単位取得退学。  
現在、仙台育英学園高等学校教員。



# 「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」について

— 学徒出陣関係資料を中心に —

東北学院資料室嘱託職員

星 洋和

## はじめに

東北学院資料室（以下、資料室）が所蔵する資料の中には、『東北学院百年史』（以下『百年史』）作成の際に収集された戦前からの文書をまとめた簿冊が大量にある。この簿冊群は東北学院が、政府、自治体、軍隊、企業、諸学校、在学生など様々な相手と取り交わした文書をまとめたものであり、『百年史』作成後は資料室で保管されてきた。しかし、『百年史』作成後、この簿冊群についての詳細な調査は行われてこなかった。

昭和一八（一九四三）年一〇月二日の在学徴集延期臨時特例により、文系の学生・生徒に与えられていた徴兵猶予が廃止（師範系、農学系の一部、理系は対象外）されたことで始まった、いわゆる学徒出陣<sup>(註1)</sup>から平成二五（二〇一三）年で七〇年を迎えた。NHKでは学徒出陣から七〇年ということで、全国にある一七〇の大学・機関を対象とした、学徒出陣に関するアンケート調査を行った<sup>(註2)</sup>。東北学院もアンケート調査の対象になっており、資料室ではアンケートに答えるための資料調査を行うこととなった。しかし、東北学院における学徒出陣は『東北学院七十年史』（以下、『七十年史』）や『百年史』でもわずかに触れられているのみで、既存の資料では調査に限界があった。

そこで新たに史料の発掘をするため、筆者が前述の簿冊の調査を行ったところ、学徒出陣に関する資料がいくつか収蔵されていることが判明した。こうして、NHKからのアンケートをきっかけに、資料室では学徒出陣に関連する資料の調査を進めることとなった。

## 1. 調査対象と調査方法

本稿では、戦時中に外部と取り交わされた文書が多く綴じられている「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」の二つの簿冊を取り上げる（写真1・2参照）。この二つの簿冊には、戦前から戦後にかけて東北学院が外部機関もしくは個人と取り交わした文書が大量に綴じられており、その中には学徒出陣を



写真1 「往復文書類綴」



写真2 「主務省文書類綴」

考えるうえで貴重な資料もある。

本稿で取り扱う範囲は、徴兵猶予の廃止や出陣学徒壮行会が行われた昭和一八（一九四三）年一〇月直前から、昭和二〇（一九四五）年一二月までの文書が綴じてある簿冊である。より具体的に言えば、「往復文書類綴」は昭和一七年八月二五日から昭和二〇年一二月二七日までに収受された三四八件の文書を含む一五から一八巻まで。「主務省関係書類綴」は、昭和一七年一二月二三日から昭和二〇年九月七日までに収受された三〇五件の文書を含む第二〇巻から第二四巻までである。なお、この件数は、来信・返信文書の内容を要約した見出し（写真3参照）がついているもののみの数であり、見出しがない文書も多々あるため、実際の件数はこの数字よりもさ



写真3 見出しの一例

らに増えると思われる。

また、この二つの簿冊をより深く理解するために同時代に使用されていた「文書收受簿第五巻」（以下、「文書收受簿」）の調査と、記載内容の文字起こしを行った。「文書收受簿」には、昭和一八年三月から昭和

二一年までの来信文書の記録が残されており、この記録と現存している簿冊の中身を比較することで、文書が現存しているか確認することができる。また、「文書收受簿」には文書が管理されていた部局や簿冊のことも記されており、当時の東北学院の文書の管理体制を考える上でも非常に参考になる。二〇一四年一月現在、昭和一八年三月から昭和二〇年一二月までの一〇〇二通分<sup>(註3)</sup>の情報の文字起こしが完了しているが、現在も作業は継続中である。こちらの成果については、また別の機会に紹介したい。

ところで、簿冊を調査していく中で気づいたことがある。筆者が調べていた簿冊および「文書收受簿」は実は東北学院高等商業部（昭和一八年に東北学院高等部から改称。昭和二〇年廃止。）で用いられていたものであり、後身校である東北学院航空工業専門学校（昭和一九年、東北学院高等商業部から転換する形で設立。昭和二一年廃止。）で用いられていた簿冊も別に存在していたのである。本稿では高等商業部で用いられていた簿冊のみを調査の対象とし、航空工業専門学校用の簿冊についての調査・考察については今後の課題とする。

本学の河西晃祐教授が指摘するように、これらの簿冊群は、質量ともに他大学のものと比較しても類を見ないものと考えられる<sup>(註4)</sup>。しかし、冒頭で述べたように本学において簿冊についての調査はまだ行われていない。そこで本稿では、今後、資料の研究を進めていくうえで必要となる簿冊に関する基礎的な情報をまとめることから始めた。はじめに、資料の背景を考えるために戦時中の東北学院の動向についてまとめ、次に資料の概要についてまとめた。これらの基礎的な情報をまとめるにあたり、『百年史』や東北学院時報、『百年史』編纂時の記録などの学内資料を参考にした。そしてこれらのデータを

踏まえて、最後に学徒出陣に関連する資料の提示を行った。

## 2. 戦時中の東北学院の動向

史料の紹介に入る前に、まずは戦時中から敗戦直後の東北学院の動向について説明する。以下、簡略にはあるが『七十年史』や『百年史』などの学内資料をもとに戦時中から敗戦直後までの東北学院の動向について見てみよう。

昭和一七年時点で、東北学院には高等部と中等部があった。東北学院高等部には、商科と文科の二つの学科があったが、財政的問題から文科を廃止することとなった<sup>(註5)</sup>。これにより、商科第一部と商科第二部（夜間部）のみとなった高等部は、昭和一八年四月から東北学院高等商業部へと改称した。しかし文系の専門学校<sup>(註6)</sup>である高等商業部は、同年一〇月、存続の危機を迎えることとなる<sup>(註7)</sup>。この事態に対して東北学院理事会は、理事の一人である萱場資郎が経営する萱場製作所（現KYB株式会社）や、東北帝国大学（現東北大学）の工学部と協力することで、航空工業専門学校の設立を計画した。そして政府や軍隊との折衝を続けた結果、一九四四（昭和一九）年四月から東北学院航空工業専門学校の設立が決まった。この航空工業専門学校の設立に伴い、理事会では高等商業部の新生の募集停止を決定し、同時に「高等商業部ハ現在生ガ卒業」、又は「適当ニ処置セラル、マデ存続」<sup>(註8)</sup>することも決定した。つまり、高等商業部の学生がいなくなるまで、東北学院には航空工業専門学校と高等商業部が同時に存在することとなったのである。この体制は、商業部の学生がいなくなる昭和二〇年まで続くこととなった。

敗戦後、東北学院は、航空工業専門学校を、同年一二月に東北学院工業専門学校へと改称した。さらに昭和二一年には、工業専門学校を東北学院専門学校（英文科・経済科）に転換。昭和二三年には新制高等学校を設立し、昭和二四年には東北学院大学を設立した。

以上、戦時中の動向を中心に東北学院の変遷を見てきた。昭和一九年から昭和二〇年までの東北学院高等部には、商業部と航空工業専門学校の二つが同時に存在していた。そのため、昭和一九年四月から昭和二一年三月までは外部から送られてくる文書も商業部宛のものと航空工業専門学校宛のものがあり<sup>(註9)</sup>、それぞれの文書を別々に管理する必要が出てきたことから簿冊を二種類用いていたと考えられる。



### 3. 史料の概要

#### 3-1. 東北学院資料室所蔵の文書・簿冊について

資料室には、外部機関・個人からの来信文書、もしくはそれをまとめた簿冊が大量に現存している。昭和五七（一九八二）年六月付の「諸資料控え」（「百年史関係資料綴」所収、資料室所蔵）によれば、資料室で管理する前は、東北学院の事務室や総務課倉庫で管理されていたようである。「諸資料控え」に記載されている文書・簿冊類は一六〇件を超えており<sup>(註10)</sup>、本章で紹介する「文書收受簿」、「往復文書類綴」、「主務省関係書類綴」<sup>(註11)</sup>もその一つであった。

#### 3-2. 「文書收受簿」・「往復文書類綴」・「主務省関係書類綴」の概要

##### 3-2-1. 「文書收受簿」について

「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」について見る前に、「文書收受簿」について見ていこう。「文書收受簿」は来信文書の記録をつける簿冊である。「諸資料控え」には、一三冊の文書收受簿が確認できる<sup>(註12)</sup>。このうち巻数がついているものは四冊あり、今回筆者が調査した文書收受簿は、その四冊の「文書收受簿」のうちの一つである。

それぞれの「文書收受簿」の頁数および、記載されている年代は表1のとおりである。第三巻は現在未発見だが、第二巻と第四巻の記載時期に空白がないことから、第三巻はそもそも存在しない可能性も考えられる。

表1 「文書收受簿」

巻数	年代	頁数	備考
第一巻	昭和3年10月5日～昭和10年9月28日	102	・1ページ目と、91ページ目以降は空白
第二巻	昭和10年10月3日～昭和15年6月17日	102	・昭和15年6月18日から19日までの三通分は項目全体に×印で消されている。
第四巻	昭和15年6月18日～昭和18年3月8日	104	・第四巻の冒頭に記載されている三通は、第二巻で消去されたもの
第五巻	昭和18年3月9日から昭和21年6月3日	98	

「文書收受簿」の中を見てみると、一頁内に二個の記載欄がある。欄にはそれぞれ発番号、收受番号、発送者名、收受年月日、件名、綴込別、取扱者印の七つの項目があり、文書の内容に従ってその項目を埋められていくようになっている(写真4参照)。なお、收受番号は一月から一二月までを一区切りとしており、年が明けるとまた一から始まる。そのため、年内最後の文書の收受番号＝その年に送られてきた文書の総数と考えてしまうが、実際は收受番号にも記載ミスと思われる個所があるため<sup>(註13)</sup>、必ずしもそうとは限らない。



写真4 「文書收受簿」

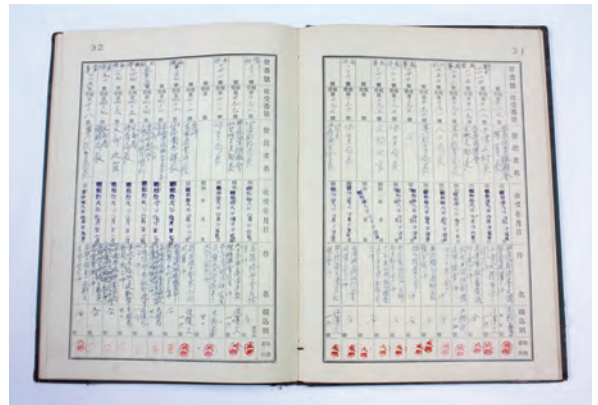


写真5 「文書收受簿」の見開き

##### 3-2-2. 「往復文書類綴」について

「往復文書類綴」は、東北学院と、外部機関もしくは個人との往復文書・電報類をまとめた簿冊である。「往復文書類綴」には、高等部や新制大学等で用いられていたもの（第一号～第二二号。大正八年一〇月～昭和三年二月）と、航空工業専門学校用のもの（第一号のみ。昭和一九年四月～昭和二年九月）がある。今回調査したのは、高等部で用いられていた一五号～一八号の四冊である(表2)。

「往復文書類綴」に綴じられている往復文書の相手は実に多様である。主な相手だけでも、宮城県や仙台市などの自治体、警察署、学生の就職先である企業や学校、各地の陸海軍部隊、東北学院在生など様々な機関・人物が見受けられる。文書の内容も様々で、防空訓練、思想の取り締まり、金属類などの資源の回収、勤労働員、陸海軍への入営・入隊に関する件など、「往復文書類綴」の中身は統一性があるものとは言えない。

さて、表2の年月を見比べると、一五号から一七号までは一冊当たり綴じられている文書が約半年

表2 「往復文書類綴」

号数	年代(※1)	件数(※2)
第一五号	昭和17年8月25日～昭和18年5月22日	132
第一六号	昭和18年5月26日～同年12月6日	121
第一七号	昭和18年12月10日～昭和19年6月19日	126
第一八号	昭和19年6月21日～昭和22年8月	91

※1 年月は、綴じられている文書の収受日から抽出した。

※2 件数は見出しがついているもののみ抽出した。



写真6 「往復文書類綴」(背表紙)



写真7 「往復文書類綴」(天)

分なのに対し、一八号には約三年分の文書が綴じられていることが分かる。その理由を考えるために、一度視点を「文書収受簿」に移してみよう。「文書収受簿」の昭和一九年六月～七月ごろの頁を見ると、従来「往復文書」として扱っていたような文書が、個別に管理されるようになっていくことが分かる。徴兵・教練などの軍事的な文書については「軍事一」(簿冊と思われる。未発見。)や「軍事教官室」で管理されるようになり、勤労働員等に関する文書は「生徒課」、資源や備品の購入・回収に関する文書は「会計課」、諸大学との往復文書は「教務課」など、目的ごとに各部局で管理されるようになっていったようである。一六号・一七号に比べて一八号に綴じられている文書の年月の間隔が広いのは、このような文書の管理体制の細分化によって、一冊あたりに綴じられる文書の量が減ったためとも考えられるが、本稿では指摘するにとどめておく。

### 3-2-3. 「主務省関係書類綴」について

「主務省関係書類綴」は、省庁やその関連組織から送られてきた文書をまとめた簿冊である。こちらも簿冊が二種類あり、一号から二五号(昭和五年～昭和二八年)までの簿冊と、一号から四号(昭和一九年から昭和二四年)までの簿冊が確認されている。前者が高等商業部用のもので、後者が航空工業専門学校用のものと思われる。今回調査したのは、前者の簿冊で第二〇号から第二四号の四冊である(表3)。

「主務省関係書類綴」に綴じられている文書のほとんどは文部省からの文書で占められている。文書の内容を見てみると、文部省内の部局によって扱っている内容に違いがあるようだが、この点についてはさらなる調査が必要である。文部省以外では、大日本育英会、大日本学徒海洋教練振興会や日本諸学振興委員会なる組織からの文書もいくつか見受けられる。

表3 「主務省関係文書類綴」

号数	年代(※1)	件数(※2)
第二〇号	昭和17年12月23日～18年4月23日	62
第二一号	昭和18年4月27日～同年7月31日	56
第二二号	昭和18年8月4日～昭和19年1月25日	75
第二三号	昭和19年1月24日～同年6月13日	51
第二四号	昭和19年6月24日～昭和21年9月8日	61

※1 年月は、綴じられている文書の収受日から抽出した。

※2 件数は見出しがついているもののみを抽出した。



写真8 「主務省関係書類綴」(背表紙)



写真9 「主務省関係書類綴」(天)



「往復文書類綴」と同じく、「主務省関係書類綴」も昭和一九年七月頃から、綴じられている文書の年月の間隔に広がりが出てくる。こちらも「文書收受簿」を見る限りでは、管理体制が細分化したことが一因として考えられる。

### 3-3. 「文書收受簿」の記録から見る「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」

「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」の中に当時の資料がどれほど現存しているか、「文書收受簿」の記録をもとに確認を行った。その結果、「文書收受簿」に記録されている昭和一八年三月から昭和二〇年一二月までの一〇〇二通のうち、「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」の中から発見できたのは五一八通、返信文書の控えのみが見つかったのは三通であった。確認できた文書の数をもとに分けると、昭和一八年の文書が二七六通で、返信のみが二通。昭和一九の文書が二二一通で、返信のみが一通。昭和二〇年の文書は九通の確認ができた。発見できた文書の中には、「文書收受簿」の記載上では「往復文書類綴」や「主務省関連書類綴」とは別の簿冊もしくは部局での管理となっている文書もいくつか見受けられる。また、見出しには「往復文」とあるにも関わらず「主務省関連書類綴」に綴じられていたり、その逆に、見出しには「主務省」とあるのに「往復文書類綴」に綴じられている文書も多々見られる。これらがどのような理由で現存している簿冊に綴じられているかは今のところ不明である。

## 4. 「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」の中の学徒出陣関係資料

ここまで、「往復文書類綴」と「主務省関係書類綴」の内容について見てきた。本章では現存が確

認できた資料の中から、いわゆる学徒出陣を考える上で重要となる資料を提示する。今回提示した資料は、昭和一八年に行われた在学徴集延期制度の廃止<sup>(註14)</sup>、出陣学徒壮行会、臨時徴兵検査の三つの事項について、文中で述べられている、もしくは文中で関連付けられているものである。なお、提示するのは今回の調査で見つけることができた分のみであり、他にも存在している可能性がある。

上記の表は、「文書收受簿」の記録を基に作成した。表の件名は「文書收受簿」の記載に従ったものであり、実際の文書の件名とは異なっている文書もある。しかし、文書の中には件名がないものもあるため、ここではすべての資料に件名を表示することを優先して、「文書收受簿」の記載をそのまま用いた。

本来であれば提示した資料の内容についても解説すべきところであるが、それについては資料の検証を行ったうえで、また別の機会に行いたい。

### おわりに

本稿では、東北学院の戦時中の動向、資料の概要や性格についてまとめた上で、学徒出陣に関連する資料の提示を行った。本校における学徒出陣研究はまだ始まったばかりであり、不明な点も多々ある。慎重に資料の検証を続けていくことで、学徒出陣の全貌を徐々に明らかにできるのではないだろうか。

今後の課題としては、三点あげられる。一つ目は、資料の詳細な調査を行うことである。今回は資料の紹介のみを行ったが、今後は紹介した資料を政策や戦況、学校の状況など様々な観点から検証していく必要がある。また、航空工業専門学校用の簿冊をはじめ、まだ未調査の簿冊が数多くある。これらの資料を調査することで、学徒出陣に限らず、さらなる資料の発見も期待できる。

発番号	收受番号	発送者名	收受年月日	件名	綴込別
発専二四一号	第三九五号	文部次官	昭和18年10月21日	十八年度臨時徴兵検査ヲ受クベキ生徒ノ取扱ニ関スル件	主務省二二
発体二三六号	第三九六号	体育局長	昭和18年10月21日	出陣学徒壮行会開催ニ関スル件	主務省二二
官専二〇六号	第四〇八号	専門教育局長	昭和18年10月29日	在学徴集延期者告発ニ関スル件	主務省二二
発専二五三三	第四二三号	専門教育局長	昭和18年11月4日	在学徴集延期制度停止ノ趣旨徹底ノ件	主務省二二
発文一一一号	第四三四号	文部大臣官房文書課長	昭和18年11月11日	学生々徒・定期乗車券料金払戻ニ関スル件	主務省二二
発専二四一号	第四五一号	教育局長	昭和18年12月1日	現役又ハ応召ノ学生生徒ノ取扱ニ関スル件	主務省二二
	第四六〇号	専門教育局長	昭和18年12月6日	昭和十八年度臨時徴兵検査判定等ニ関スル件	主務省二二
	第四一号	専門教育局長	昭和19年2月23日	教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ伴フ私立学校経費補助ニ関スル件	主務省二三
発専一四四号	第一五四号	専門教育局長	昭和19年5月20日	教育ニ関スル戦時非常措置方策実施ニ伴フ私立学校補助ニ関スル件	主務省二三

二つめは、戦時中の学内組織について調査することである。本稿で述べたように、昭和十九年の中ごろから文書の管理体制が細分化されていたことが分かる。細分化に至るまでの経緯や、文書を管理していた各部局の性格を把握することで、学徒出陣関連資料などの軍事的資料が、当時の東北学院の中でどのように位置づけられていたのかが見えてくるはずである。

三つ目はこれらの簿冊群が東北学院の歴史の中でどのように扱われてきたのかを検証する事である。全国的に見ても、学校における戦時中の資料の多くは、戦災や戦後の混乱期に焼失・紛失してしまったとされる<sup>(註15)</sup>。事実、GHQの進駐に備えて、仙台の諸学校で様々な資料が廃棄されたことが分かっている<sup>(註16)</sup>。しかし、本稿で紹介したように東北学院資料室には戦時中の資料が数多く残されている。なぜ、これだけの資料が紛失することなく残っているのかを検証することで、戦時中から敗戦直後における東北学院の動向の一端を知ることができるのではないかと考えられる。

#### 註釈

- 註1 一般的には昭和十八年一月二日の徴兵猶予廃止、同年一月二日の出陣学徒壮行会をもって学徒出陣とすることが多いが、昭和一六（一九四一）年一月の大学・専門学校・実業学校における修学年限短縮からを対象とする考えもある（明治大学資料センター、二〇〇一年、一二頁）
- 註2 <http://www9.nhk.or.jp/nw9/marugoto/2013/09/0923.html>
- 註3 「文書収受簿」の中には×印で削除されている欄もいくつか見られるが、それも含めた数である。
- 註4 「東北学院時報」第七一八号（二〇一三年一月）
- 註5 『七十年史』 六五三―六五六頁
- 註6 昭和一五年の学則に「東北学院ハ専門学校令ノ趣旨ニ從ヒ…高等教育ヲ授クルヲ以テ目的トス」とあり、名称は高等部だが、法令的には専門学校の扱いであった。
- 註7 『七十年史』によれば、閣議決定として戦時非常措置方策が出たことで、文系の専門学校は理系の専門学校に転換せざるを得なくなったという。また『百年史』によれば、東北管区司令軍からの廃校命令が九月に出ていたという。
- 註8 『百年史資料編』 四四三頁
- 註9 文書の宛先を見ると、東北学院宛、東北学院院長宛など、商業部宛・航空工業専門学校宛のどちらとも取れる文書もある。
- 註10 「他雑件類数点」という記載が見られるため、正確な数は不明である。ここでは、個別具体的に記載されて

いる資料の件数を数えたうえで、「他雑件類数点」という記載を考慮して一六〇件以上とした。

- 註11 「主務省関係文書類綴」は第二四巻のみが「諸資料控え」に記載されている。
- 註12 ほかの「文書収受簿」は現在未確認であるが、「諸資料控え」に記載されている内容から、航空工業専門学校用のものや新制大学用のものと思われる。
- 註13 例えば、昭和十九年六月三〇日に送られてきた文書の収受番号は二一九号だが、その次に送られてきた文書の収受番号は二一〇号と記載されている。そして続いて送られてきた文書は二一一号とされ、そのまま訂正されることなく順番に番号を付けられている。
- 註14 文書中では、在学徴集延期停止（「十八年度臨時徴兵検査ヲ受クベキ生徒ノ取扱ニ関スル件」）、徴集猶予停止（「学生々徒・定期乗車券料金払戻ニ関する件」）、在学徴集猶予撤廃（「教育ニ関スル戦時非常措置方策実施ニ伴フ私立学校経費補助ニ関スル件」）など表記にバラつきがみられる。
- 註15 老川慶喜・前田一男編『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』 二〇〇八年 五頁
- 註16 仙台市史編纂委員会『仙台市史特別編4 市民生活』 一九九七年 二七一頁

#### 参考文献

- 老川慶喜・前田一男編『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』 二〇〇八年 東信堂
- 京都大学大学文書館『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』 一巻・二巻 二〇〇六年 京都大学大学文書館
- 志子田光雄「回想・土樋キャンパス物語」 二〇〇一年 学校法人東北学院（東北学院資料室運営委員会編『東北学院資料室』創刊号所収）
- 仙台市史編纂委員会『仙台市史特別編4 市民生活』 一九九七年 仙台市
- 鶴本勝夫「東北学院理工系教育機関の系譜とその人脈」 二〇一二年 学校法人東北学院（東北学院資料室運営委員会編『東北学院資料室』vol.11所収）
- 東北学院百年史編集委員会『東北学院百年史』 一九八九年 学校法人東北学院
- 東北学院百年史編集委員会『東北学院百年史資料編』 一九九〇年 学校法人東北学院
- 永田英明「東北帝国大学における「学徒出陣」」 二〇〇七年 東北大学学術資源研究公開センター史料館（東北大学学術資源研究公開センター史料館『東北大学史料館紀要』第二号所収）
- 蛭川寿恵『学徒出陣―戦争と青春』 一九九八年 吉川弘文館
- 花輪庄三郎編『東北学院七十年史』 一九五九年 東北学院同窓会

明治大学資料センター編『戦争と明治大学－明治大学の学徒  
出陣・学徒勤労動員』 二〇一〇年 明治大学

参考資料・参考ホームページ

NHK「newsWatch9特集まるごと」

<http://www9.nhk.or.jp/nw9/marugoto/2013/09/0923.html>、

参照：二〇一四年一月一七日

河西晃祐「東北学院大学に残された学徒出陣関連資料」（『東北  
学院時報』第七一八号）、二〇一三年十一月一五日発行二頁  
三品鼎「東北学院と裏方」その二、その三、その四（『東北  
学院時報』第二九七、二九八、二九九号）一九七四年

「東北学院一覽」 一九四〇年（資料室所蔵）

「百年史関係資料綴」（資料室所蔵）

星 洋和プロフィール HOSHI, Hirokazu

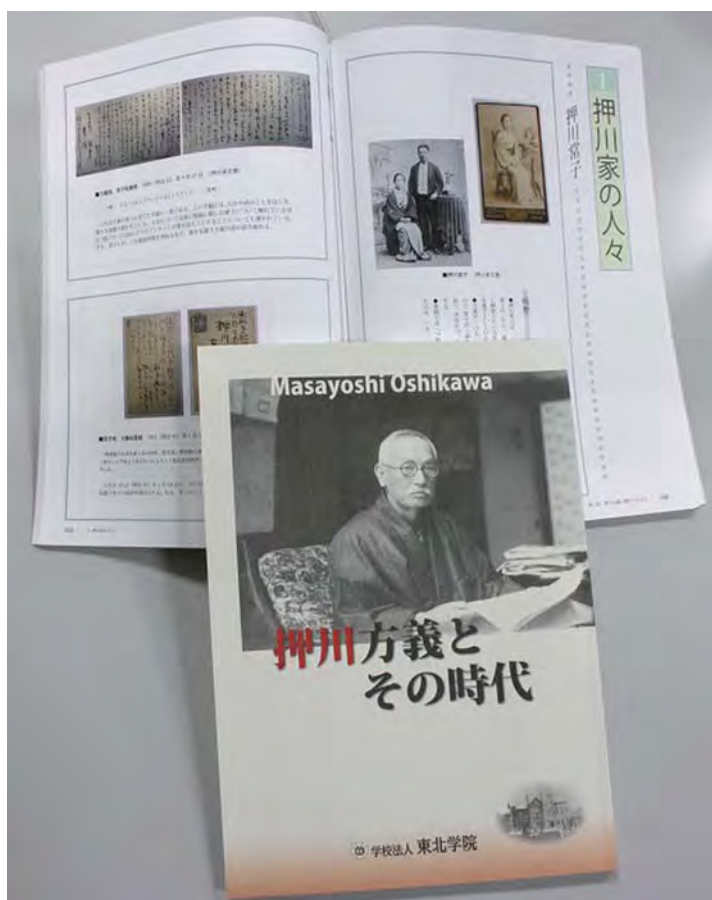
1989(平成1年)生まれ。  
東北学院大学文学部歴史学科卒業。  
東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻博  
士前期課程修了。



## 東北学院125周年記念事業 図録『押川方義とその時代』刊行

東北学院創立125周年記念事業の一環として作成された図録『押川方義とその時代』が刊行された。平成16年11月に、押川方義の孫である押川昌一氏から、方義とその家族が遺した膨大な史資料（「押川家文書」）の寄贈をうけ、整理・分析作業が行われてきたが、その中には、これまでに東北学院が刊行してきた『東北学院七十年史』や『東北学院百年史』などでも取り上げられていないばかりか、全国の図書館などにも所蔵されていない貴重な史資料も数多く含まれていた。

この図録では、方義の78年の生涯をはじめ、彼の活動の軌跡を、この「押川家文書」を中心に紹介している。



完成した図録『押川方義とその時代』



仙台時代の押川方義

# 文化庁より「デフォレスト館」の 登録有形文化財登録証とプレート授与

平成24年9月21日に国の登録有形文化財に答申されたデフォレスト館（旧シップル館）に、文化庁から「登録証」と「登録プレート」が届き、4月10日、地域の文化財を所管する仙台市教育委員会生涯学習部の山口宏部長から平河内健治理事長に手渡された。



デフォレスト館



山口宏生涯学習部長（左）と平河内健治理事長



登録有形文化財登録証は、平成25年3月29日付、文部科学大臣の署名が入り、

デフォレスト館  
木造2階建、鉄板葺、建築面積193㎡  
上記の文化財を文化財保護法第57条第1項規定により、  
文化財登録原簿に登録したことを証する。

と記されている。



登録有形文化財登録証



登録プレート



# 東北学院大学文学部 史学科・歴史学科 創設50年記念事業

さわやかな秋晴れに恵まれた11月2日、文学部史学科・歴史学科創設50年記念行事が開催され、多くの卒業生や関係者が集った。

## <記念講演会・記念講義>

土樋キャンパスでは、東北文化研究所創設45年記念も兼ねた記念講演会と、3つの記念講義が開催された。記念講演会は、本年度で退官される榎森進教授の最終講義としても位置づけられ、会場の押川記念ホールには多くの聴衆が訪れた。



押川記念ホールでの講演会



ゼミ生から花束を贈られる榎森進教授

## <記念式典・懇親会>

記念講義終了後、会場を江陽グランドホテルに移し、記念式典と祝賀会が行われた。

記念式典では、渡辺昭一学科長が挨拶。続けて40周年からの10年の歩みを紹介し、松本宣郎学長が挨拶と祝辞を述べた。



引き続き行われた懇親会では、懐かしい恩師の紹介や現職の先生方による自己紹介、史学科・歴史学科の歩みをまとめたVTRの上映、恩師や同窓生からのスピーチなどのプログラムが進む中、久しぶりに再会した旧友や恩師と語らう同窓生の輪が会場のあちこちで見られた。



懇親会の様子



出席者全員での記念撮影



## 宮城県教育委員会と包括連携協力協定を締結

東北学院大学と宮城県教育委員会は10月15日、学校教育・学術の振興及び地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的に包括連携協定を締結し、同時に防災教育に関する連携実施に係る確認書を取り交わした。

この協定では、大学・学校における教育研究・調査研究、学生・児童・生徒の学習支援、教員の養成及び研修などに関する事項で連携協力することとしている。



高橋仁教育長（左）と松本宣郎学長



## 国土交通省東北地方整備局と 連携・協力に関する協定を締結

東北学院大学と国土交通省東北地方整備局は、これまで長年にわたり培ってきた信頼関係を基盤に、より緊密かつ組織的な連携・協力の推進・強化を図ることに合意し、1月28日協定を締結した。

東北地方整備局が大学と連携・協力に関する包括的な協定を結ぶのは、東北大学に続き2大学目となり、私立大学との協定締結は初めてとなる。



小池剛局長（左）と松本宣郎学長

# 登録有形文化財「デフォレスト館」の魅力 シンポジウム開催

平成25年度 文化遺産を活かした地域活性化事業  
— デフォレスト館を通して「仙台の英学史を知る」—

平成25年3月に国の登録有形文化財に登録された「デフォレスト館」の魅力を伝えるためのシンポジウムが、2月21日、土樋キャンパス押川記念ホールで開催された。



第1部は「デフォレスト館 その魅力」と題し、平成24年5月から行われたデフォレスト館の建築史的調査の成果について、調査に当たった3名の先生から以下の報告がなされた。

- 「デフォレストの人物像とデフォレスト館の概略」 志子田光雄 東北学院大学名誉教授
- 「デフォレスト館の建築史的調査の概要と成果」 野村 俊一 東北大学大学院工学研究科助教
- 「他事例との比較によるデフォレスト館の特徴」 足立 裕司 神戸大学大学院工学研究科教授

また、後半のディスカッションでは、デフォレスト館の今後の保存や活用に向けての方向性について活発な意見交換が交わされた。



発表する志子田光雄名誉教授



モデレータの櫻井一弥准教授(左)とパネリスト



# 東北学院 東日本大震災アーカイブプロジェクト 『After 3.11 東日本大震災と東北学院』刊行

東日本大震災後の3年間にわたるプロジェクトの集大成として、東北学院における震災記録をまとめた記録集となる『After 3.11東日本大震災と東北学院（全652頁）』とDVD版「証言インタビュー集 After 3.11東日本大震災と東北学院（2時間46分）」が同時刊行され、3月5日、土樋キャンパスにおいて完成発表会を開催した。



あいさつする平河内健治理事長



編集の経緯等を説明する柴田良孝プロジェクト委員長（中央）

完成発表のあいさつで、発行人の平河内健治理事長は「震災から3年が経とうとしているいま、『記憶の風化』がささやかれ始めております。『魂と精神の学びの風化』をも恐れるところです。あの出来事の後、どのようなことが積み重ねられてこの3年を迎えることができたのか、本書は、大震災の記憶を風化させないための記録としてだけでなく、手にとられた方々が、わが身のこととして、『そのあと』をいかに生きるべきかを問い直していただけましたら、幸いです。本書が東北学院全体の記録として残り、今後の減災・防災に役立つことを願って止みません」と述べた。



## 『After 3.11 東日本大震災と東北学院』

学校法人東北学院 東日本大震災アーカイブプロジェクト委員会 [編]

発行／学校法人東北学院

発売／有限会社荒蝦夷

四六判上製 © 652頁

本体価格 2,858円＋税

DVD版「証言インタビュー集 After 3.11 東日本大震災と東北学院」非売品



# 時 事

2013年4月～2014年3月

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
2013年 4月	1日	役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式／大学長に松本宣郎氏／中学・高等学校長に大橋邦一氏／幼稚園長に阿部正子氏／幼稚園教頭に佐藤洋子氏／法人事務局次長に佐藤範明氏／庶務部長に斎藤英夫氏／人事部長に若生克義氏／財務部長に駒板高明氏／大学新入生オリエンテーション（～7日）	1日	第64回対青山学院大学総合定期戦（本学主管）（～3日）／県高等学校総体（～3日）	
	3日	大学入学式	3日	6月1日付人事異動に伴う辞令交付式	
	5日	中学校1年・高等学校1年学習オリエンテーション（～6日）	8日	市中学校総体（～10日）	
	6日	せんだい・杜の都親善大使に本学の教養学部2年の丸屋杏奈さん、経済学部3年の安倍由夏さん2名が選出	14日	TG十五日会	
	8日	中学校・高等学校入学式、寄宿舎入舎・対面式	16日	2013年度レクチャーコンサート「時代の音」（第1回）「通奏低音チェロは容易で目立たずつまらぬ仕事か？」	
	9日	榴ヶ岡高等学校入学式／幼稚園入園式	21日	第59回対北海学園大学総合定期戦（北海学園大学主管）（～23日）	
	10日	文化庁より「デフォレスト館」の登録有形文化財登録証とプレート授与／「東北学院歴史的建造物ガイド」発行	22日	初夏さわやかオープンキャンパス：教養学部（人間科学科、言語文化学科、情報学科、地域構想学科）	
	12日	TG十五日会／幼稚園イースター礼拝	26日	工学部学生総会	
	15日	硬式野球部・雨天練習場落成式	27日	大学院特別選考（A日程）入学試験	
	17日	幼稚園PTA総会	29日	初夏さわやかオープンキャンパス：文学部、経済学部、経営学部、法学部（土樋）と工学部（多賀城）／本学と宮城県中小企業家同友会との包括連携に関する協定締結式	
22日	中学校・高等学校・榴ヶ岡高等学校イースター礼拝	7月	5日	大学院特別選考（A日程）合格発表	
27日	中学校・高等学校奨学会総会		11日	宗教音楽研究所主催「宗教音楽の夕べ」開催	
			12日	TG十五日会	
5月	1日	中学校・高等学校運動会	13日	中学校・高等学校オープンキャンパス	
	2日	榴ヶ岡高等学校奨学会総会	21日	県中学校総体（～24日）	
	8日	大学春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～9日）	8月	1日	FD研修会
	15日	創立127周年記念式典／墓前礼拝／TG十五日会／学校法人東北学院デジタルアーカイブ「東日本大震災の記録 Remembering 3.11」が一般公開		3日	夏まるとオープンキャンパス（泉）／（多賀城～4日）
	16日	榴ヶ岡高等学校総体壮行会		5日	第39回大学宗教部「サマー・カレッジ」開催（～7日）
	19日	青山学院大学との共同イベント「駅ナカ学ing」をJR仙台駅で開催		19日	平成25年度多賀城スコーレ〈サマースクール〉（～23日）
	21日	幼稚園遠足		22日	全学職員研修会
	22日	名誉教授称号記授与式／多賀城市との連携協力協定事業の一環として開催する「地域市民のための大学公開講座」（～7月10日まで毎週水曜日：計8回）	24日	榴ヶ岡高等学校オープンキャンパス／幼稚園オープンキャンパス	
	25日	大学後援会総会	9月	6日	榴ヶ岡高等学校「榴祭」（～7日）
		7日		中学校・高等学校「学院祭」（～8日）	
		12日		TG十五日会	

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事				
9月	21日	幼稚園運動会	2014年 1月	7日	中学校入学試験	
	26日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験		8日	中学校入学試験合格発表	
	30日	9月期卒業証書・学位記授与式		15日	TG十五日会	
10月	4日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験合格発表／ノンラム大学（ベトナム）と国際交流協定締結		17日	企業研究セミナー開催（～19日）	
	8日	大学秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～9日）		18日	大学入試センター試験（～19日）	
	10日	編入学試験（A日程）		28日	国土交通省東北地方整備局と連携・協力に関する協定を締結	
	12日	工学部祭（～13日）		29日	高等学校入学試験	
	13日	工学部・教養学部オープンキャンパス／泉キャンパス祭（～14日）		31日	榴ヶ岡高等学校入学試験	
	15日	宮城県教育委員会と包括連携協力協定を締結／TG十五日会		2月	1日	大学一般入学試験 前期日程（～3日）／高等学校入学試験合格発表
	18日	編入学（A日程）／合格発表六軒丁祭（～20日）			4日	榴ヶ岡高等学校入学試験合格発表
	25日	総合学術誌「震災学vol.3」を発刊	9日		大学一般入学試験（前期日程）・センター試験利用入学試験（前期）・外国人留学生特別入学試験合格発表	
26日	ホームカミングデー開催／幼稚園オープンキャンパス／幼稚園造形展（～27日）	13日	TG推薦誓約式			
11月	2日	東北学院大学文学部史学科・歴史学科創設50年記念事業・式典開催	14日		TG十五日会	
	7日	大学推薦入試	19日		大学院春季入学試験（～20日）	
	9日	東北学院文化講演会2013（福島）	21日		シンポジウム「登録有形文化財『デフォレスト館』の魅力」開催	
	15日	大学推薦入試合格発表／TG十五日会	28日		レクチャーコンサート「時代の音」（第3回）「究極の室内楽《弦楽四重奏》の中でのチェロ～作曲家と演奏家～」開催	
	16日	保護者のための就職セミナー開催（多賀城キャンパス）	3月	1日	高等学校卒業式／榴ヶ岡高等学校卒業式	
17日	保護者のための就職セミナー開催（文学部・経済学部・経営学部・法学部・教養学部）	3日		大学院春季入学試験合格発表		
19日	レクチャーコンサート「時代の音」（第2回）『通奏低音楽器から旋律楽器へ～進歩か変化か～』	4日		大学一般入学試験後期日程、社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験、再入学試験		
12月	6日	泉キャンパスクリスマス		5日	東日本大震災アーカイブプロジェクト「After 3.11 東日本大震災と東北学院」完成発表会／「総合学術誌「震災学vol.4」を発刊	
	13日	TG十五日会		11日	大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験、再入学試験合格発表／『After 3.11 東日本大震災と東北学院』刊行	
	18日	幼稚園クリスマス	14日	卒園式／TG十五日会		
	20日	第64回公開東北学院クリスマス／榴ヶ岡高等学校クリスマス	25日	卒業証書・学位記授与式／中学校卒業式		
	21日	中学校・高等学校公開クリスマス	27日	宮古市と連携協力に関する協定を締結		
	25日	多賀城スコレ・ウィンタースクール開催（～27日）				

# 東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「 <b>仙台神学校</b> 」開設(5月)。教師2名、生徒6名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「 <b>東北学院</b> 」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	<b>労働会創設(3月)</b> 。東北学院理事局を組織、 <b>初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)</b> 。東北学院開院式(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年		<b>第2代院長にD.B.シュネーダー就任</b> 。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		<b>東北学院同窓会結成</b> 。
1904(明治37)年		全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年		専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。 <b>東二番丁に普通科校舎完成</b> 。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「 <b>社団法人東北学院</b> 」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		<b>創立25周年記念式典挙行</b> 。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		<b>『東北学院時報』創刊(1月)</b> 。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。





年代	歴代役職者	事項
1920(大正9)年	 五十嵐正	中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年		中学部寄宿舎再建(9月)。
1922(大正11)年		中学部校舎再建〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉(6月)。
1923(大正12)年		東北学院教会設立(5月)。
1925(大正14)年		神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926(大正15)年	 出村悌三郎	南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。
1928(昭和3)年		専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。
1929(昭和4)年		専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。
1930(昭和5)年		高等学部師範科に専攻科1年を置く。
1932(昭和7)年		高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。
1933(昭和8)年	 E.H.ゾーグ	高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。
1934(昭和9)年		神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。
1936(昭和11)年		高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。
1937(昭和12)年		神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。
1938(昭和13)年		中学部長に田口泰輔就任(4月)。
1939(昭和14)年	 田口泰輔	中学部長に出村剛就任(4月)。
1940(昭和15)年		南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。
1941(昭和16)年		高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。
1942(昭和17)年		高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。
1943(昭和18)年		高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務(4月)。
1944(昭和19)年	 小泉要太郎	航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。



年代	歴代役職者	事項
1945(昭和20)年		中学校長に出村剛就任(4月)。 <b>航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)</b> 。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年	宮城音五郎	高等商業部および同第二部を廃止(3月)。 <b>東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任</b> 。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	杉山元治郎	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		<b>東北学院専門学校から新制大学に昇格</b> 。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。 <b>小田忠夫初代学長に就任</b> 。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	出村剛	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。 <b>第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)</b> 。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。 <b>第6代院長に小田忠夫就任</b> 。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	月浦利雄	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年		中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を多賀城市に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年	鈴木義男	多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年		<b>創立70年記念式典挙行</b> 。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	A.E.アンケニー	中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年	小田忠夫	中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼務(1月)。短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。 <b>高等学校榴ヶ岡校舎を開設</b> 。『東北学院七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年	五十嵐正躬	文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		<b>多賀城町(現多賀城市)に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置</b> 。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1964(昭和39)年	 山根篤	東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年		東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舍完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舍完成。青根セミナーハウス完成。
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舍開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。『東北学院大学学報』第1号創刊(10月)。
1969(昭和44)年		工学部旭ヶ丘寄宿舍開設。第9代理事長に月浦利雄就任(4月)。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 二関敦	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敦就任(9月)。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年		榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂(現仙台市泉区天神沢)に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年		東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舍完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年		大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年	 田口誠一	創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年		中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年	 清水浩三	大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊(6月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。
1979(昭和54)年		大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。蔵王TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店・10月)。
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1981(昭和56)年		大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(東北学院大学学報を改称)(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年	情野鉄雄	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。 <b>第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月)</b> 。第11代理事長に児玉省三就任(4月)。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年		高校第二部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年	児玉省三	新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年		大学整備計画案(教養学部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。 <b>幼稚園新園舎完成(12月)</b> 。
1986(昭和61)年	宗方司	<b>創立100周年記念式典挙行</b> 。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成(3月)。
1987(昭和62)年	宗方司	中学・高等学校長に宗方司就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任(4月)。中学・高等学校体育館武道館完成(12月)。
1988(昭和63)年		<b>大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転</b> 。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成(3月)。幼稚園長に橋本清就任(4月)。
1989(平成元年)	半澤義巳	<b>泉キャンパスに教養学部(教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻)を設置</b> 。幼稚園長に新妻卓逸就任(4月)。『東北学院百年史』発刊(5月)。
1990(平成2)年		大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年	武藤俊男	多賀城キャンパス1号館完成(3月)。榴ヶ岡高等学校部室棟完成(3月)。中学・高等学校長に武藤俊男就任(4月)。中学・高等学校社会科教室完成(7月)。
1992(平成4)年	武藤俊男	大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成(4月)。第12代理事長に情野鉄雄就任(6月)。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定(3月)。
1994(平成6)年	倉松功	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年	倉松功	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。 <b>第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任(4月)</b> 。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任(4月)。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施(9月)。
1997(平成9)年	脇田睦生	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長が兼務(4月)。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年	出原莊三	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。 <b>大学設置50周年記念式典を挙行</b> 。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任(4月)。



年 代	歴代役職者	事 項
2000(平成12)年	 杉本勇	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（9月）。大学第一回ホームカミングデー（同窓祭）開催。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。 
2001(平成13)年	 赤澤昭三	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（4月）。東北学院資料室開設（5月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年	 星宮望	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年	 赤澤昭三	第14代理事長に赤澤昭三、 <b>第9代院長および同窓会長に倉松功就任（4月）</b> 。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。
2004(平成16)年	 星宮望	法科大学院・総合研究棟完成（2月）。 <b>第4代大学長に星宮望就任（4月）</b> 。中学・高等学校長に松本芳哉就任（4月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築（4月）。
2005(平成17)年	 久能隆博	<b>中学・高等学校新校舎完成（仙台市宮城野区小鶴）（1月）</b> 。 東北学院同窓会館閉館（3月）。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設（4月）。 
2006(平成18)年	 永井英司	工学基礎教育センター完成（3月）。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称（4月）。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任（4月）。 <b>創立120周年式典挙行（5月）</b> 。
2007(平成19)年	 星宮望	中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成（3月）。 <b>第10代院長に星宮望就任（4月）</b> 。中学校・高等学校長に永井英司就任（4月）。秋田オープンキャンパス開催（7月）。多賀城市との連携協定締結式（11月）。
2008(平成20)年	 平河内健治	第15代理事長に平河内健治就任（6月）。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成（9月）。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。
2009(平成21)年	 湯本良次	経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部共生社会経済学科を新設（4月）。大学院経営学研究科（修士課程）を設置（4月）。幼稚園長に平河内健治兼任（4月）。榴ヶ岡高校創立50周年記念式典挙行（11月）。東北学院大学博物館開設（11月）。
2010(平成22)年	 赤澤昭三	バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設（3月）。東北学院発祥の地に記念碑建立（10月）。
2011(平成23)年	 赤澤昭三	中学校・高等学校跡地に記念碑建立（3月）。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組（4月）。幼稚園長に佐々木勝彦就任（4月）。
2012(平成24)年	 湯本良次	榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任（4月）。工学部設置50周年記念式典挙行（11月）。
2013(平成25)年	 平河内健治	<b>第5代大学長に松本宣郎就任（4月）</b> 。中学・高等学校長に大橋邦一就任（4月）。幼稚園長に阿部正子就任（4月）。文学部史学科・歴史学科創設50周年記念式典挙行（11月）。

## 受贈資料一覧

2013年4月～2014年3月

日付	寄贈者	受贈資料
2013.4	東北学院大学	震災学 vol.2
2013.4	学校法人東北学院	図録 押川方義とその時代
2013.4	学校法人追手門学院	追手門学院ブックレット2「志の教育」
2013.4	福岡大学75年史編纂室	福岡大学75年の歩み 資料編
2013.4	学校法人皇學館	皇學館大學百三十年史 資料篇
2013.4	学校法人立命館	立命館百年史 通史三
2013.4	学校法人神奈川大学	学問への誘い—大学で何を学ぶか—
2013.4	日本基督教団新庄教会 多田眞牧師	日本基督教団新庄教会百年史
2013.5	NPO法人賀川豊彦記念・ 鳴門友愛会	鳴門市賀川豊彦記念館創立十周年記念誌
2013.5	学校法人拓殖大学	拓殖大学百年史 昭和後編・平成編
2013.5	学校法人尚綱学院	学校法人尚綱学院 120年の歩み
2013.5	仙台市	仙台市史 現代2
2013.6	近畿大学教職教育部	「近畿大学の大学アーカイブズと学内資料の収集・保存に関する基礎的研究」研究報告書
2013.6	庄司一幸	三春教会百十三年史 —子守学校から幼稚園の開園、ラークア伝道まで—
2013.6	国立大学法人富山大学	第1回 富山大学展図録
2013.9	学校法人根津育英会武蔵学園	武蔵九十年のあゆみ
2013.9	学校法人大東文化学園	大東文化大学の歩んできた道
2013.9	岡本泰典	飯柴永吉の佐藤清明あて書簡(1) —宮城の植物第38号別刷
2013.10	東北学院大学工学部記念誌 編纂委員会	東北学院大学工学部設置50年記念「軌跡」
2013.10	松浦平蔵	辞書の鬼 明治人・入江祝衛
2013.10	東北学院大学	震災学 vol.3
2013.10	東北大学総務部総務課	東北大学 東日本大震災記録集 3.11から記録と記憶をつないで、次代へ、世界へ
2013.11	学校法人獨協学園	獨協百三十年
2013.12	学校法人上智学院	上智の100年
		叡智が世界をつなぐ (DVD)
2013.12	学校法人英知学院 聖トマス大学	聖トマス大学 創立50周年記念誌
2013.12	学校法人東海大学学園史 資料センター	キャンパスに描いた夢—湘南の半世紀—
2014.2	学校法人明治学院	明治学院百五十年史
		明治学院百五十年史 主題編
2014.3	学校法人東北学院	After 3.11 東日本大震災と東北学院
		DVD版証言記録集 3.11東日本大震災と東北学院
2014.3	東北学院大学	震災学 vol.4
2014.3	福岡大学	福岡大学75年の歩み 事業編
2014.3	学校法人関西学院	関西学院の美術家～知られざる神戸モダニズム～

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。





## 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

### 開室時間

月～金 10:45～16:00

土 10:45～12:00

(日・祝祭日は閉室いたします。)



## 学校法人 東北学院

発行日 2014(平成26)年4月1日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX022-264-6478

<http://www.tohoku-gakuin.jp/>

印刷 株式会社東北堂

